

「自分は自由な行為者だ」という実感をもったロボットを制作するために…エピフェノメナリズムが真でなければ、  
どうやってこれを作れようか？…

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Shibata, Masayoshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00065218">http://hdl.handle.net/2297/00065218</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「自分は自由な行為者だ」という実感を

もったロボットを制作するために

…エピフェノメナリズムが真でなければ、どうやってこれを作れようか？…

柴田正良(金沢大学名誉教授)

Dec. 04, 2021

東北大学川内キャンパス文学部研究棟

「日本技術哲学の総合研究と国際化」(基盤研究(B) 18H00601) + 「道徳的行為者のロボットの構築による<道徳の起源と未来>に関する学際的探究」(基盤研究(A) 19H00524) + 「東北大学 哲学倫理学合同研究室」による研究会(コラボレーション編)

## 目次らしきもの

1. エピフェノメナリズム（随伴現象説）はなぜ嫌われ者なのか？
2. 感情・情動・気分
3. 考え・推理・論理的思考
4. 「自由である」という実感（／クオリア？）
5. 自分の人生におけるエピフェノメナリズム

なぜ人は、自分の意図や考えが自分の脳活動や行動を従わせる、あるいはリードする、あるいはその行き先を定めると思うのか？

- ここでの話の前提は、存在論としての物理主義
- 物理主義 → 物理的な個体と性質が他のすべての存在の有り様を決定する
- 物理過程は因果必然性を持つ。したがって心的事象の生起は因果必然的に決定されている。
- それゆえ物理主義の下では倫理や道徳が無意味になる。

# 心的事象としての意志はまったく無力

従来の倫理や道德の前提は、われわれの〈意志の自由〉を背景に、思考や行為が自分たちによって自由に行われていることだった。

しかし、「まったく先行原因をもたない意志」（そんなものは存在しない）はもちろん、「意志としての限りでの遺志」はどんなものであれ、物理過程にも、したがって他の後続の心的事象にも何の影響も与えない。

他律的で決定された「自由」は自由ではないし、それによって生み出される意図や思考や行動も自由ではない。それらは単なる物理過程の結果にすぎないのだから、自然事象と同じく、それらに責任を問うのはバカげているだろう。

エピフェノメナリズムのゆえに物理主義を排するのではなく、ロボットとの共生の倫理を構築する上での構成的な前提として捉える

感情・情動・気分

この種の心的状態は脳や身体の生理化学的状态に依存し、それによって決定されている、と言われても人は大して驚かない。エピフェノメナリズムの見やすい例だろう。

考え・推理・論理的思考

合理的判断や論理的推論をする場合も、脳活動の因果過程自体は合理的でも、論理的でもない。それらは生理化学的もしくは神経生理学的な法則に従ってのみ進行する。

判断や推論を担う表象（シンボル）操作は、駆動装置＝脳の因果性にも拘わらず、いかに自らを合理的／論理的であるかのように思わせることができるのか？

必要な舞台装置（主なもの）：

- ・ 表象
- ・ 心的空間（舞台）
- ・ 表象を操作していると思いついでいる操作主体
- ・ 動力（表象の因果的力ではない）
- ・ 「自分は自由である」という実感

計算機やAIと違い、人間の場合には、表象操作の合理性・論理性を実現するための脳内メカニズムが、生得的に存在するわけではない。

合理的判断・論理的推論は、因果過程をリードできない。  
だから、プラトンの「アイデアとしての合理性・論理性」  
は脳では表象できて、実現（実行・遂行）できない。

しかし、合理性や論理性を「規則に従うこと」というレベルの表象操作だと考えるなら、クリプキ、ヒューム流の「規則遵守の懐疑論」が、むしろ問題の解決を示す。

人が「あのではなくこの規則に従っている」という堅固な事実は存在しない。あるのは、有限な領域での人々の間での有限事例における一致にすぎない。

有限の事例における人々の一致は、恐らく、脳内ニューロンの強化学習によるディスポジションの獲得によって実現されるだろう。



ある文脈において偶然にあるタイプの因果過程が出現することが、合理的判断や論路的推論を生み出す



「偶然性が論理必然性の幻想を生み出す」

判断や推論の論理必然性を実現するために因果過程から脱却する必要もないし、因果過程を超越した主体が必要なわけでもない。

具体的な欲求 → 意図 → ある規則に従う

これが実際の「心的要因の海」の中でどう行われるかの解明には、新たな法則と語彙をもつ「脳神経心理学」（と呼ぼう）が必要である。

## 「自由である」という実感（／クオリア？）

動物は自分を自由だと感じているのだろうか？　それがないと、なにか不都合か？　自由だという実感があるうとなかろうと、動物の行動の成否には関係がない。

では、人間は？

「自由である」という実感は、人類にとって進化上の生存価を高める効力はなかっただろう。それは、別の何かの機能進化に付随する副産物ではないか。

人間の場合も、欲求が生じ、行動への意図が形成され、行動するだけのことだからだ。

では、表象レベルでの多くの選択肢の存在と、反実仮想の能力は？

## 「自由である」という実感が機能として実現されている必要はない

実際、「自由である」という実感（自由クオリア？）をまったく欠いた生物体が、生存の上で何らかの不利を被ることはなかったであろう。

「自由である」という実感は、色感覚や痛覚のような際立った独立のクオリアではない。それは、一つのまとまった本体をもっていない。

「自由である」という実感の正体は、意図的な行動にまつわる一連の身体感覚や期待や感情や気分などから合成された雑多な心的状態であるように思われる。その由来は、これまでの次のような行動経験ではないか。

- ・ やりたいことをやっていること
- ・ 他人から強制されていないこと
- ・ 止めたいと思えば止められること
- ・ やりたいことを選ぶこと
- ・ 反実仮想ができること
- ・ （反実仮想を元に）あのとき今とは別のようになろうと思えばそのようにできたはずだ、と思えること、等々。

この実感は、因果連鎖によって決定されていることと矛盾しないし、また、因果連鎖から解放された無原因性を必要とするわけでもない。

## 反実仮想能力の重要性

「やりたいことを選べること」と「やりたいことをやっていること」という経験が、過去の状況に投射されるとき、その過去の状況において「仮にあの時とは違う選択をしていたら、あの時とは違う行動をしていたら」という反事実的な表象（観念）が形成される。

これは、「まさにあの時そのような選択はできなかった」、「自分の選択を含め、すべては決定されていたのだ」という表象（観念）とは相容れないだろう。

こうして、「自分は自由だ」という実感は、「自分は因果連鎖の支配を受けない自由をもつ」という偽なる幻想を生み出す。

# 反実仮想に由来するこの偽なる幻想は 決して反証されない

これは、倫理的思想にとってうってつけの支柱となる。

というのも、伝統的な倫理観によれば、人の行為に責任を問えるのは、それが因果連鎖によって必然的に結果したのではなく、彼が因果連鎖を無効にする自由によってその行為を創始したからだ。

「自由である」という実感は、因果連鎖を無効にするようなメカニズムを必要としないのであるから、ロボットがそれを持つことは可能である。いや、ロボットと共生する倫理道徳システムのためには必要ですらあろう。

# 自分の人生におけるエピフェノメナリズム

日常におけるエピフェノメナリズムの2つの問題

1. 行為者に対する帰責の問題
2. いわゆる「運命論」の問題

1. 帰責は、行為のもつ合理性によって判断する。

合理性は因果性に還元できないし、程度を許すので、これは、自然科学的には「恣意的」な基準に見えるだろう。神は完全な合理性の持ち主ゆえに、自分の行為に100%の責任を負う。単なる物体と見なされた人の身体運動は、0%。

幼い子どもや軽度の認知症者を含めた「われわれ」は、その中間に位置するだろう。

心神喪失と心神耗弱にどれくらい責任を認めるかは、その社会の倫理道徳システムの有り様を示すリトマス紙かもしれない。<sup>14</sup>

なぜなら、これらをどう扱うべきなのか、あるいはどう扱った方が良いのかを、絶対的な根拠から正当化するのは困難だからだ。

自然科学的な根拠も、あるいは手続き論を含めたアприオリな哲学的根拠も、心神喪失・心神耗弱に関する唯一の正しい扱い方をわれわれに与えるようなものではない。

つまり、何を望ましい倫理道德システムとするかは、われわれの創造と選択の問題である。

われわれがどういう流儀、どういう好みで他人やロボットや動物に対することを望むか、という問題。

2. 「すべてが既に決まっている」という主張は、日常生活において、無意味である。

なんと、宇宙の因果過程が安定した時期にまで遡れば、その宇宙の初めから、私がいま何を欲し、何を意図するかがすでに決まっていた！ 身も蓋もない嫌なイメージかもしれないが・・・



現に生じた世界のどんな出来事の記述に対しても、「となることはすでに決まっていた」という記述を付け加えても、何も加えたことにはならない。それは丁度、「ということは真である」という記述と同じ。

「予言破りの自由」(大森荘蔵)

あなたは、「時刻  $t$  で行為  $a$  をするだろう」という予言を常に破ることができる。しかし、「それも実はすでに決まっていたのだ」とうそぶく、この人知を越えた予言者もあなたも、両方ともに正しい。  
予言破りの自由と普遍的因果決定性は、両立可能だ。

人は、この「予言破りの自由」のレベルで、自分の欲することをなす自由をもつ。しかし、そのレベルで生じるすべてのことは、物理的因果連鎖によって決定されている。この2つのレベルを混同するな！

「人間は自由という刑罰に永遠に処されている」(サルトルか?)、その自由のメダルの裏には、同じくらい無内容な真実として、「人間は必然という刑罰に永遠に処されている」(エピフェノメナリズム)という言葉が刻まれている。

おしまい

柴田の研究関連webサイト

<http://siva.w3.kanazawa-u.ac.jp/>